

美術館の建物…東京都美術館

同窓会会員：安達美帆子

投稿日：2016年3月3日

美術展を見るのが好きでよく出かけます。ある日の夕方、東京都美術館で展覧会を見終わって、さあ帰ろうとロビーを歩いている時に、「トビカン・ヤカン・カイカン・ツアーに参加して夜の美術館を見てみませんか」と声をかけられました。映画の「ナイトミュージアム」や子ども向けの企画「美術館にお泊り」などが頭に浮かんで話を聞いてみましたら、「夜の美術館の建物を散策するツアーで、ライトアップした建物が綺麗ですよ」とのこと。その言葉に惹かれて参加することにしました。

ツアーの時間は30分くらい。参加費は無料で、グループごとにボランティアのアート・コミュニケーター（とびラー）が案内をしてくれます。それまでは美術館は作品を見に行くところであって美術館の建物そのものを楽しむという発想はありませんでしたが、とびラーの説明が面白く、改めて美術館の建物にも興味を持ちました。皆様にも少しご紹介いたします。

東京都美術館（愛称：トビカン）は、日本最初の公立美術館として1926年に開館しました。約半世紀後の1975年、建物の老朽化に伴い前川國男氏設計の新館への建て替えが行われ、更に35年後の2010年から2012年に大規模改修工事が行われて、現在の建物となりました。



東京都美術館の正門を入るとすぐに目に付くのが、周囲の風景を映している大きな球体です。何気なくそこにありますので単なるオブジェと思われがちですが、これはれっきとした彫刻作品で、東京都美術館に常時展示されている立体作品12作品の一つです。

井上武吉 my sky hole 85-2 光と影 1985

ステンレス・鉄

反対側の下部にも小ぶりの穴があり、写真に見えている大きな穴とは内部で繋がっていて、下から覗くと空が見えます。

周囲を見回すと、正面と左右に建物があります。右手に見える建物は企画展が行われる企画棟、左手は公募展などが開催される公募棟、正面が中央棟とその右側につながる交流棟です。

建物は一見するとレンガ作りに見えますが、これはレンガではなく分厚いタイルパネルで、「打込みタイル」という工法で作られています。コンクリートで壁を作る時に、型枠を作ってその中にコンクリートを流し込む「打込み」という工法があります。「打込みタイル」工法では、タイルパネルを型枠の棧木に留めつけて、その後コンクリートを流し込んで壁と表面のタイルパネルを一体化します。コンクリートを流し込む際に表と裏のパネルがコンクリートの重みで外側に膨らまないように、セパレーターと呼ばれる長い棒のようなものでパネル同士を留めて、パネルとパネルの間に



コンクリートを流し込みます。写真では見えにくいのですが、タイルの溝の部分に小さな穴が開いていて、それが桟木とパネルを留めていた釘穴です。レンガのように見えている個所に開いている大き目の穴は、セパレーターを留めていた穴です。

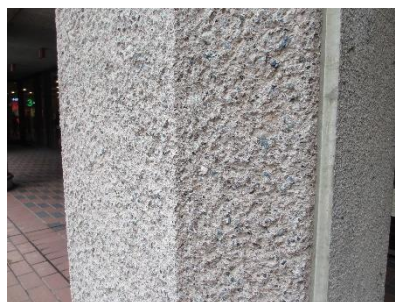
この工法はタイルが剥がれにくく安全と言われています。またタイルパネルは吸水率 5% 以下のものを使用していますので、雨で濡れても藻やコケが生えにくいそうです。

東京都美術館の入口は、地下の中庭に面した中央棟地下 1 階にあり、それがこの美術館の大きな特徴の一つとなっています。

東京都美術館がある上野恩賜公園は公園全体が風致地区に指定されているため、建築物の高さや建築面積に制限があります。そのため建物の地上部分だけでは展示スペースを確保できず、美術館は総面積の約 60% を地下に展開しました。展示スペースは地下 3 階にまで広がり、入り口も地下一階に作られました。



「my sky hole 85-2」の横を通って中央棟に向かって歩いていくと、中庭に降りる階段とエスカレーターがあります。階段横はコンクリートの壁になっていて、よく見ると表面に木目が見えます。コンクリートを流し込むために使用する型枠は以前には木で作られていて、型枠を外すとその木目がコンクリートに写っていました。この壁が作られた 1975 年頃はもう型枠のほとんどがプラスチック製となっていました。木目を出すためにわざわざ拘りの杉材を取り寄せて型枠として使用したそうです。



地下広場に降りて周囲を見回すと、建物のコンクリート壁がデコボコの模様になっていることに気が付きます。これは「斫り（はつり）加工」と呼ばれる手法で、コンクリート表面を鑿やノミなどで叩いて削り、ざらざらとした表面にしたものです。すべて手仕事ですので、時間も手間もかかったそうです。



「斫り加工」された壁や柱には視覚的な暖かみが生まれるだけではなく、光が当たるとききれいな陰影ができ、光そのものも柔らかく見せてくれます。東京都美術館の夜間の照明は、この美しさを生かすように設置されているそうです。

タイルパネルや斫り加工という手法は館内の壁にも使われていますので、建物内でも見ることが出来ます。

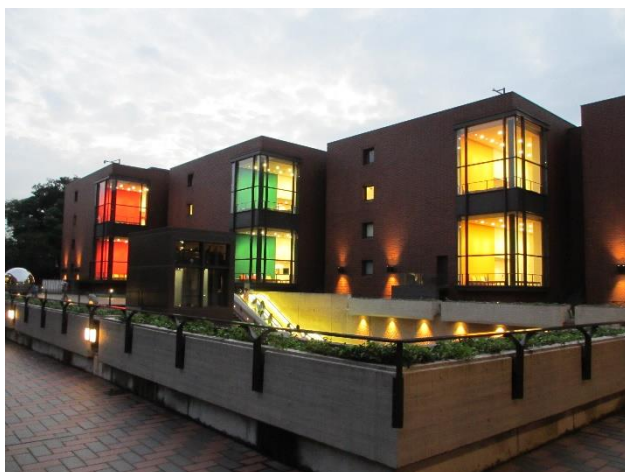
日が落ちてきて建物の外にも灯りが付くと、昼間とはまた異なる景色が見えてきます。右の写真は、地下一階中央棟入り口前から中庭を見たところです。エスカレーターにも灯りが付きました。

東京都美術館では外の照明の数は多くありません。建物内部から漏れてくる灯りを生かすように設計されているそうです。



さて美術館入り口から館内に入り、右手に少し進んでガラス越しに中庭と企画棟を眺めると、天井の灯りがずっと並んでいるのが見えます。よく見ると全部が本物なのではなく、天井の灯り、ガラスに映った灯り、その先の企画棟建物内の灯り、さらにその先のガラスに映った灯り…と続いて行って、どこまでもきれいに一直線に続いているように見えます。

外が暗いからこそ見える灯りの列で、「ヴェルサイユ宮殿の灯りのよう」という人もいます。



再び外に出てエスカレーターで1階に戻り、中央棟の前から公募棟を見てみます。

公募棟は4つの展示部分に分かれ、それぞれ青・黄・緑・赤のテーマカラーがあります。外が暗くなると、館内の灯りに照らされたテーマカラーが浮かび上がってきます。

私のカメラでは残念ながら建物全体を一度に撮影することは出来ませんでした。一番右側の青の部分は下の写真のように見えます。

この写真を撮った一階中央棟前は、知る人ぞ知る夜の撮影スポットなのだそうです。





トビカン・ヤカン・カイカン・ツアーの最後に、案内と解説をして下さっていた「とびラー」から宿題が出ました。一枚のポスターのような写真を出して、「この写真の場所を見つけて下さい」とのことでした。ヒントは「美術館の正門を出て、駅（上野駅）の方に少し歩いて、建物を振り返る」。

このヒントのお蔭で私も無事に場所を見つけることが出来、ポスターのような一枚！を撮ることが出来ました。

トビカン・ヤカン・カイカン・ツアーでは、ここには書ききれませんでした。美術館内も案内していただき、もっと詳しい説明もしていただきました。興味のある方はぜひ参加してみてください。

ツアーを実施している「とびらプロジェクト」では、夜間ツアー以外にもいろいろな企画が実施されています。詳細は、以下のHPの「お知らせ・募集」をご覧ください。

とびらプロジェクト（東京都美術館×東京藝術大学） <http://tobira-project.info/>

東京都美術館で企画展が開催されている期間の金曜日は、美術館は午後8時まで閉館していますので、暗くなってからの美術館の様子もゆっくり見ることが出来ます。美術展を見て、美術館の建物も見て、ミュージアムショップで買い物をして、もしかすると上野でディナーも？楽しい一日を過ごせますように。